

# OSAKA MUSEUMS

vol.6 TAKE FREE

特集

# 育てよう。

大阪市内  
5ミュージアムの  
スケジュール&トピックス

7月-9月  
2018

大阪市立科学館 プラネタリウムホール

## OSAKA MUSEUMS SCHEDULE & TOPICS 7月-9月

※金額表記のない展示などは、常設展示観覧料でご覧いただけます。  
※すべての施設は、中学生以下・大阪市在住の65歳以上の方(一部、特別展を除く)、障がい者手帳等をお持ちの方は無料です。  
※団体割引などがある場合があります。詳細は各施設にお問い合わせください。

	7月	8月	9月		
<b>大阪歴史博物館</b> 開館時間 / 9:30AM~5:00PM ※入館は閉館の30分前まで ※特別展会期中の金曜日は8:00PMまで 休館日 / 火曜(祝日の場合はその翌平日) ※8/14(火)は開館 常設展示観覧料 / 大人600円 高校生・大学生400円 <a href="http://www.mus-his.city.osaka.jp/">http://www.mus-his.city.osaka.jp/</a>	<b>6/27-8/20</b> <b>特集展示</b> <b>天保の光と陰</b> 明治維新の基点、天保期。薩摩藩の天保改革や、大塩平八郎の乱などを取り上げます。 <b>明治維新150年 NHK大河ドラマ特別展</b> <b>西郷どん</b> 西郷隆盛の生涯と彼を取り巻く維新の群像を、リアルな資料を通じて浮き彫りにします。 <b>一般1,300円、高校生・大学生900円</b> <b>7/28-9/17</b>		<b>8/22-10/29</b> <b>特集展示</b> <b>発掘された古代・中世の住吉</b> 南北朝時代に南朝の拠点となるなど、歴史上重要な地であった住吉を紹介します。		大阪市中央区大手前4丁目1-32 tel. 06-6946-5728 
	<b>7/21-10/21</b> <b>特別展</b> <b>きのこ!キノコ!木の子!</b> 名前がわからなくても、見ているだけで興味深い。自然からの謎かけとも言える不思議なきのこを見つめて楽しもう。 一般500円、高校生・大学生300円 				大阪市東住吉区長居公園1-23 tel. 06-6697-6221 
<b>大阪市立自然史博物館</b> 開館時間 / 9:30AM~5:00PM (11月~2月は4:30PMまで) ※入館は閉館の30分前まで 休館日 / 月曜(祝日・休日の場合は翌平日) ※8/13(月)は開館 常設展示観覧料 / 大人300円 高校生・大学生200円 <a href="http://www.mus-nh.city.osaka.jp/">http://www.mus-nh.city.osaka.jp/</a>	<b>-7/16</b> <b>特別展</b> <b>フランス宮廷の磁器</b> <b>セーヴル、創造の300年</b> 一般1,200円、高校生・大学生700円		<b>7/28-8/19</b> <b>特集展示</b> <b>古代イランの土器と青銅器</b> <b>一形と装飾</b> ささまざまな装飾技法、金属器の製造技術が発達した、古代イランの地に花開いた個性豊かな造形をご紹介します。 一般500円、高校生・大学生300円		大阪市北区中之島1-1-26 tel. 06-6223-0055 
	<b>9/1-11/25</b> <b>特別展</b> <b>高麗青磁</b> <b>一ヒスイのきらめき</b> 翡翠のように美しい釉色の高麗青磁の名品約250件を、「祈り」と「喫茶文化」を切り口にご紹介します。 一般1,200円、高校生・大学生700円 重要文化財 青磁九龍浄瓶 (大和文華館蔵) 写真/六田知弘				
<b>大阪市立東洋陶磁美術館</b> 開館時間 / 9:30AM~5:00PM ※入館は閉館の30分前まで 休館日 / 月曜(祝日・休日の場合は翌平日)、展示替期間(7/17~7/27、8/20~8/31) 右記の料金を常設展も含め、館内の展示すべてをご覧いただけます。 <a href="http://www.moco.or.jp/">http://www.moco.or.jp/</a>	<b>7/6-7/18</b> <b>特別展</b> <b>第64回全関西美術展</b> 一般700円、高校生・大学生500円 <b>コレクション展</b> <b>涼風颯々夏のやきもの</b> 江戸時代の陶工・永楽保全(1795~1854)の作品をはじめとする、清々しいそよ風が吹き抜けるような目にも涼しい陶磁器の数々をご紹介します。 <b>7/6-7/18, 7/31-9/1</b>		<b>7/31-9/1</b> <b>コレクション展</b> <b>動物を描く—近世・近代の日本絵画—</b> 身近な動物への親しみ、珍しいものへの憧れ。画家たちが描いた愛らしい動物たちの姿をご紹介します。 《唐犬》(右扇) 橋本関雪 (大阪市立美術館蔵)		大阪市天王寺区茶臼山町1-82 (天王寺公園内) tel. 06-6771-4874 
	<b>7/6-7/18, 7/31-9/1</b> <b>7/6-7/18, 7/31-9/1</b>				
<b>大阪市立美術館</b> 開館時間 / 9:30AM~5:00PM ※入館は閉館の30分前まで 休館日 / 月曜(祝日・休日の場合は翌平日)、7/12(木)、展示替期間(7/19~7/30) ※7/9(月)、7/17(火)、8/13(月)は開館 コレクション展観覧料 / 一般300円 高校生・大学生200円 (特別展は別料金) <a href="http://www.osaka-art-museum.jp/">http://www.osaka-art-museum.jp/</a>	<b>6/1-9/2</b> <b>サイエンスショー</b> <b>スーパー磁石で大実験</b> 「どうして鉄は磁石にくっつくの?」。素朴な疑問を実験で解き明かしましょう。 		<b>プラネタリウム</b> <b>注目! 火星大接近</b> 2018年は「火星大接近」の年。火星がどんなふうに見えるかをご紹介します。 大人600円、高校生・大学生450円、3歳以上中学生以下300円 		大阪市天王寺区茶臼山町1-82 (天王寺公園内) tel. 06-6771-4874 
	<b>6/1-9/2</b>				
<b>大阪市立科学館</b> 開館時間 / 9:30AM~5:00PM ※展示場入場は4:30PMまで ※プラネタリウム最終投影は4:00PMから 休館日 / 月曜(祝日・休日の場合は翌平日) ※8/13(月)は開館、9/3(月)から展示場(サイエンスショーを含む)は休止します 展示場観覧料 / 大人400円 高校生・大学生300円 ※プラネタリウムは別料金 <a href="http://www.sci-museum.jp/">http://www.sci-museum.jp/</a> ©2019年4月にリニューアルオープンします	<b>6/1-9/2</b> <b>サイエンスショー</b> <b>スーパー磁石で大実験</b> 「どうして鉄は磁石にくっつくの?」。素朴な疑問を実験で解き明かしましょう。 		<b>プラネタリウム</b> <b>注目! 火星大接近</b> 2018年は「火星大接近」の年。火星がどんなふうに見えるかをご紹介します。 大人600円、高校生・大学生450円、3歳以上中学生以下300円 		大阪市北区中之島4-2-1 tel. 06-6444-5656 
	<b>6/1-9/2</b>				



子どもと一緒に考えよう

# この展示で何がわかる？



ゆらゆら動く磁石

## 「洗面台とブラックホール、渦の法則は同じなんです」 石坂千春さん

実はこの装置は天体の運動を擬似的に観察できる。ボタンを押すと、滑らかな斜面にゆっくり白い球が転がり出す。中央の穴にまっすぐ落ちるのかと思いきや、楕円を描いて転がり続け、穴の近くでは落ちそうでなかなか落ちない。一体どうして？「中心近くでは動きが速くなりすぎて落ちないんです」と学芸員の石坂さん。「重力に引かれた物体は楕円軌道を描き、運動の中心に近いほど速く回ります。『ケプラー運動』と言います。この運動の原理は、洗面台の栓を抜いた時の渦、あるいはブラックホールの渦にも見られる現象です。くるくる回る球をいつまでも見飽きないのは、宇宙の真理に触れる動きだからなのかもしれない。

子どもたちにはこう伝えて！ 太陽系では、太陽に近い惑星ほど公転速度が速く、遠い惑星ほど遅くなります。宇宙は真空中で摩擦がないから、惑星はずっと回り続けることができるんだよ！



ケプラーモーションNEO

## 大阪市立科学館の体験型展示

宇宙空間で起きている現象、目には見えない原子の動き、あるいは、この世界の不思議を明らかにする方法を、わかりやすく教えてくれるのが、大阪市立科学館の展示。映像やパネル、模型のほか、装置を使って実験できる展示もありたくさん。教科書では「？」だったことを、「1」に変えてくれるのだ。

例えば磁石同士の作用を実験する「ゆらゆら磁石」。小さな子どもでも遊べるシンプルな展示ながら、実は「鉄原子の動き」として見ることもできるという奥深さ。また、ボールがくるくる回っているだけのように見える「ケプラーモーションNEO」は、太陽の周りを惑星が公転する動きやブラックホールの渦のヒミツまでと驚くべきスケール感を秘めている。子どもたちの夏休みの自由研究のネタも見つかるかも？

●今回紹介した展示はすべて4階のもの。なお改修工事のため9月3日以降は展示場は休止となるのでご注意ください。2019年4月1日リニューアルオープン。

## 「ゆらゆら動く磁石から何がわかるだろう？」 西岡里織さん

箱の上のツマミを動かすと、あら不思議！ ツマミで触れていない磁石まで一緒になってゆらゆら。「磁石から磁石へ、磁力が伝わっていくからです」。学芸員の西岡さんが、大きな磁石をガラスに載せて動かすと、磁石が激しく反応した。「この展示、とても奥が深いです。鉄が磁石にくっつくのは約770℃まで。それ以上温度が高いとくっつきません。実は、鉄は原子の一つひとつが磁石のようなもの。高温になると、この展示の磁石のように向きがバラバラになるので、鉄は磁石にくっつかなくなるんです。目には見えない原子の世界まで想像できれば、なるほど深い。

子どもたちにはこう伝えて！ 「ゆらゆら磁石」を動かす前と後を見比べると、どんなに激しく動いてもなぜか同じ向きで止まることに気づくはず。自由に動いているように見えるけれど、磁石の動きは周りの磁石に影響されているんだよ。



# 何に使うの？

## 大阪文化財研究所の土人形

お茶碗や徳利、人の顔や動物、かまどや鳥居も。どれも3〜5cm程度のミニチュアサイズで可愛らしい。これらは大阪市内の江戸時代後期の町屋や蔵屋敷跡から出土したもので、当時の子どもたちが遊んだおもちゃ。粘土を素焼きしたものが多く、中には釉薬が



## 「りんごは、赤色が好き？ キライ？」 長谷川能三さん

箱に取り付けられた覗き口から中を見ると、りんご・葉っぱ・地球の絵が見える。手元のボタンから、試しに赤を押すと照明が赤に切り替わり、りんごが見えなくなってしまった。実は太陽光などの白っぽい光は、虹の七色を含んでいる。物質は特定の色だけを反射していて、それを見て私たちは赤や青の色を認識する、というわけ。「りんごがなぜ赤く見えるかという、赤っぽい光だけを跳ね返し、他の色の光は吸い取っているからなんです」と長谷川さん。「では、りんごは赤色が好きでしょうか。嫌いなのでしょうか？」。えーっと、赤色だけを跳ね返すから嫌いな？ そんな風に考えると面白い。

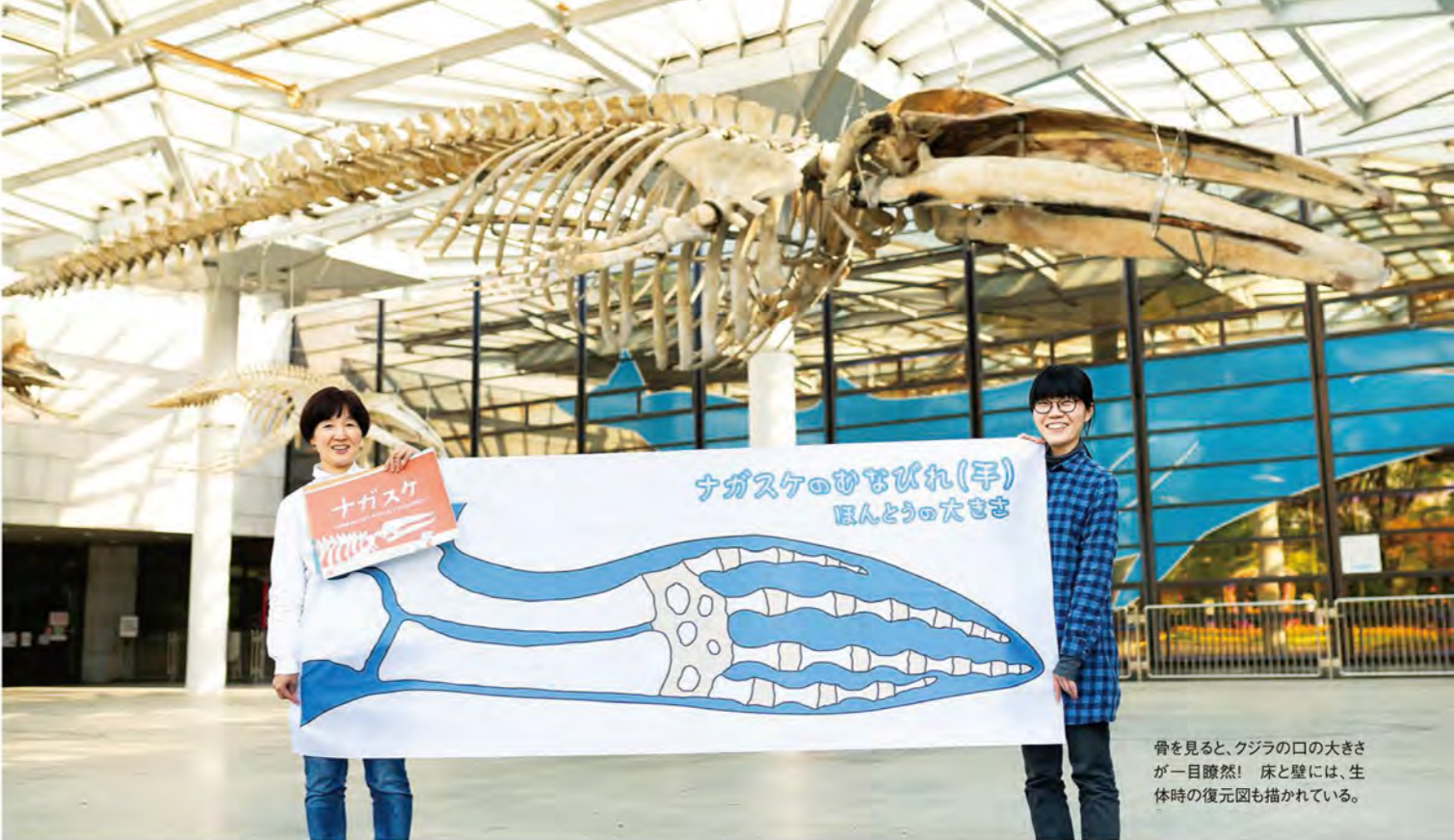


子どもたちにはこう伝えて！ この世界に色があるのはなぜだろう？ それはものに含まれる「色素」の働きによって、特定の色を吸収したりはね返したりしているから。今着ている洋服やカバン、靴にもいろんな色素が含まれていて、それでものの色が決まっているのです。



上/食器はおまごど用。なかなか精巧に作られている。下左/鳥の形をしているのがガラガラや笛。よく見るとタコやカニの形になっているのはおはじきだそう。下右/土人形と分類されるこうした出土品は膨大な数がある。

塗られたやや上品なものも。「おまごど」に使ったり、振ると音がするものは赤ちゃんの『ガラガラ』でしょうね（大阪文化財研究所・小田木富慈美さん）。  
こうしたおもちゃは町で気軽に売られていたそうで、観光地では土産物やお守りとして売られていた。また、古代中国の風雅な文化を好む「文人趣味」の流行の中で、人形や建物を箱庭のように飾って遊ぶ大人たちもいた。  
考古学の資料とはいえおもちゃだけに、「面白い！」「なんだこれ？」とか、素朴な感想から歴史に興味を持ってほしい」と小田木さん。ミニチュア好きは現代でも同じ。昔の人も一緒だったと気づくだけで、遠い時代もぐんと身近になる。  
●土人形の一部は、大阪文化財研究所の難波宮調査事務所（中央区法円坂1-6-41）の資料展示室にて見学可能。



骨を見ると、クジラの口の大きさが一目瞭然！ 床と壁には、生体時の復元図も描かれている。

## 大阪市立自然史博物館の貸出キット

**昆虫** 虫や植物の標本、骨格、紙芝居などで、さまざまな学校向け貸出キットをオリジナルで制作。小学校を中心に、幼稚園から高校まで、年間約70〜80件の貸し出しを行っている。

「一番人気は『ナガスケ』の紙芝居。実物大の胸びれを描いたタペストリーも一緒に貸し出すことで、その大きさを実感してもらいます。遠足前に読んでもらった生徒たちは、『クジラの骨格を見つけると『ナガスケくん！』』と呼びながら来てくれます」と、博学連携を担当する釋知恵子さん（左）と大江彩佳さん。現在、第2弾の紙芝居「ナウマンゾウ」を制作中だそう。

理科だけでなく国語の授業で使えるようにと、先生たちの意見を取り入れながら制作した「たんぼぼ」と「虫の体」も好評だ。長いものは1メートルの根っこをタペストリーに。それを見て「根っこを掘ってみよう！」「たんぼぼを探しに行く生徒もいるという。学校と博物館、子どもと自然との橋渡しに、一役も二役も買っているようだ。

●貸出キットは他にもいろいろ。利用希望の場合は自然史博物館のミュージアムサービスセンターへ問い合わせ。

「たんぼぼキット」(上)と「骨のキット」(下)。頭骨は、肉食動物と草食動物の頭の骨の違いを観察できる。



「持って帰れる」が人気のワークショップ。

毎月行われる「子どもワークショップ」では、認定NPO法人大阪自然史センターのスタッフが子どもたちと「ハカセ」(学芸員)の出会いをプロデュース。ユニークな企画を連発している。「子どもは最も自然に近い人たち。自由な発言、楽しみ方をしてほしい」と同センターの山中亜希子さん。展示を楽しんだ体験グッズに落とし込み、持ち帰れるおみやげに仕立てるアイデアも秀逸だ。

## 大阪歴史博物館のハンズオン

**歴史** 史や古典の教科書で見たことがある衣装や道具を遊びながら体験させてくれる大阪歴史博物館の「ハンズオン」。10・9・7階にて各フロアのテーマに合わせた企画を実施している。

例えば奈良時代の難波宮を原寸大で復元した10階「古代フロア」では、「大宮人になってみよう」。展示の設定は聖武天皇による遷都の勅を橘諸兄が読み上げる荘厳な儀式……その歴史的瞬間に衣装を着て参加できるというわけだ。写真撮影もOKで、大人だけでなく子ども向けの衣装も用意されている。

水都の町並みを再現する9階「中世・近世フロア」では、江戸時代の「両替商」や町人の遊び「投扇興」がある。ハンズオンはぜんぶで6種類。まずは楽しみながら、大阪の歴史に触れてみよう。

●ハンズオンは毎日開催。全6種類のうち日替わりで体験可能。開催日は歴博のホームページで確認できる。



### 両替商になってみよう!

金・銀・銭の三貨が流通していた江戸時代。異なる種類の貨幣を交換するのが両替商だった。ここでは当日の交換レートに合わせて、小判一枚(一両)の両替を体験。天秤に分銅を置き、「一両分の銀貨」を計る。テンションが上がってしまう。



### 投扇興に挑戦!

投扇興は江戸時代後半に町人の間で流行した遊び。中央に置いた桐箱の「枕」に「蝶」と呼ばれる的を置き、扇を投げ合う。投げた扇と落ちた蝶、枕の位置関係を、源氏物語になぞらえたオリジナルの点式にそって採点する。



### 大阪名所双六をやってみよう!

明治29年(1896)の双六は、当時の大阪名所32ヶ所を紹介。大阪市章のみおつくし、住吉大社の高灯籠、通天閣をかたどったコマを片手に巡ってみよう。ところどころでクイズがあり、正解するとコマを進められる。



白井直賢《鼠図》(絹本着色)



原正在《猫図》(絹本着色)

●取り上げた2作品は、いずれも「コレクション展」動物を描く」において展示予定。スケジュールはP8を参照。

やってみよう!



### 大宮人になってみよう!

大宮人とは古代の宮中で天皇に近侍することを許された官人。女性は写真のような「鬘」(さしは)を天皇にさしかける「奉鬘女孺」(はとりのによじゆ)をモデルにした衣装を身に付けられる。展示された大宮人の人形と並ぶと、儀式に参加している気分?



学びの「入口」にぴったり

かわいい!

## 大阪市立美術館の動物絵

ふ っくらと丸くなって眠る猫と春の光のようなれんげ草。江戸の人気猫画のひとつ、原正在の《猫図》を前にするとつい口元がほころぶ。が、絵に添えられた言葉を解読すると、笑ってばかりはいられない。「才能や功績もなく高禄を食むことは、鼠を駆らず眠る子猫に引けをとらない」と手厳しい。

「猫図」を展示するときは、隣に白井直賢の《鼠図》をかけることが多いですね」と、大阪市立美術館の学芸員・秋田達也さん。眠る猫の隣で、安心して羽をたたく3匹の鼠たち。モチーフの関係性が動かない絵に動きをもたらす。

絵の背景まで知ると、見えていたはずの世界が変化する瞬間がある。好きな動物を描いた絵を見比べていくと、画家の作風の違いが面白くなる。かわいい動物たちの姿にも、絵画鑑賞のヒントがたくさん隠れている。

# お仕事 図鑑

## 大阪市立 東洋陶磁美術館

1982年、住友グループによる「安宅コレクション」の寄贈の申し出を受けて、東洋陶磁器の専門美術館として開館。韓国陶磁の「李秉昌（イ・ビョンチャン）コレクション」や濱田庄司作品などの寄贈、日本陶磁の収集によるコレクションは、質量共に世界第一級。2点の国宝と13点の重要文化財を所蔵する。特別展・企画展は高い専門性と芸術性を誇り、自然採光展示ケースといった展示設備に対する工夫も行き届いており、国内外に多くのファンを持つ。

# 専門館のコレクションを活かした 研究と展示のサイクルを

学芸課 近現代陶芸担当 宮川智美さん(談)

現在、学芸員は館長も含めて7名。館の出発点である韓国・中国陶磁を中心にそれぞれ専門分野があり、日本の茶道具が専門の者もいます。私は国内外の近現代陶芸を担当していますが、それは館として今後力を入れていきたい分野でもあり、そのようにして扱える領域を増やしています。

報告の場を設け、一般の方に還元することができず。また、コレクションが豊富にあることで、特別展の内容と関連する所蔵品を展示できないため、特別展の規模や企画に柔軟性が生まれます。

私はここで働くようになってまだ4年目ですが、学芸員全員に研究の最前線をリードする意識と、それが面白いことだと共有されている雰囲気を感じます。新しい資料や日本では知られていない作品、これまでとは違う価値観。それらが常に展示や図録に反映される体制が整っているのが当館の強みではないでしょうか。



取材時は「セーブル展」(P8)の展示作業の真っ最中。担当する展覧会の作品の配置を考えたり、搬入に立ち会うのも学芸員の大切な仕事。

当館では、単館で企画する展覧会も多く、私も早くゼロから展覧会をつくれるよう力をつけたいです。館蔵品を活かしながら、現代的な視点で作品を見直せるような企画になればいいですね。新しい作品もコレクションに加えながら、世界中の人に見てもらえる美術館にしたいと思います。

## ミュージアム用語集

### その2 【レプリカ】

大阪市立自然史博物館の学芸員 田中嘉寛さんに聞きました。

レプリカと聞くと、「ニセモノ」をイメージする方が多いようですが、「この化石はレプリカです」と説明すると、たいがいがつかりされます。でも、実物とレプリカの関係は、必ずしも「本物vsニセ物」ではありません。それぞれ、レプリカは博物館の世界では展示と研究に大活躍しています。レプリカには、研究と展示の両



上はポリエステルレジンによるイルカの耳の骨のレプリカ。現在はこうした軽い素材が主流に。下は石膏によるアンモナイトのレプリカ。手軽に作れるが、重くて弱いという短所が。

方において多くの利点があります。例えば、大きな恐竜の骨格を、骨化石はとても重いので、落下すると一大事です。それを防ぐには金属で支えなければいけません。そうなると思えば悪くなってしまうですね。その点、ポリエステルレジンという新しい素材で作るレプリカなら、軽くて耐久性もバツグン。迫力ある恐竜の化石を展示できるというわけで



また、本物の化石は世界に一つだけですが、レプリカならみんなで見られます。私のように、世界各国にあるイルカの耳の化石のレプリカを集めて、日本で比較研究を行うことも可能です。

写真もいいですが、複雑な形を理解するにはレプリカがとても役立ちます。精巧なレプリカを制作するには知識や経験、色を塗るセンスも必要。「レパレーター」という専門の技術者もいるほどなんです。



## リレーエッセイ MUSEUMS TRIBUNE

第2回  
津村記久子さん(作家)

# 「それでいい」と、 受け入れてくれた 仏像。

最初の会社ではしんどい思いをしたけれども、もちろん個人としては良い人も職場にはたくさんいた。そんな人の中の一人である先輩に、わたしはフェルメールの《青いターバンの少女》のポストカードをあげたことがある。お店やグッズエリアで買うようなものではなく、駅のラックで配っている無料のものだ。先輩が使っている沿線では、どうも配布されていなかったらしい。

立美術館に行った。すごく混んでいたのは覚えているけれども、その後もつと混んでいる展覧会にもいったことがあるので、もしかしたらそれほどでもなかったのかもしれない。

「彼女」は、群がる人々を横目に見ながら、ただ少し驚いたような顔をして

に向けたような展覧会もやるけれども、個人的にここ数年でもっともぐつときたのは「北魏石造仏教彫刻の展開」だった。この展覧会で見た仏像たちの顔は、今まで見たどの仏像よりも受容の感覚があつて、フリーランスになつて間もなく不安だったわたしは



illustration: Kyoko Yamakuni

「それでいいのよ」と言ってもらったように思えた。美術館の入口の風景は、《青いターバンの少女》が天王寺にやってきた時とほとんど変わっていないように思える。入口の階段を上りながら、いつもわたしは、そういえばここで「彼女」を見て、今も驚かせてちよつと申し訳なかったと思ひ出す。

絵画史上最高の美しい人は誰か、とときどき考えて遊ぶことがあるのだけれども、結局10秒ぐらいで《青いターバンの少女》があつたな、という結論が出て終わる。当時、わたしには美術館に行く習慣なんかなかったけれども、どうしても彼女が一目見たくて大阪市

いた。小さい絵だった。もちろん感動するんだけれども、こんなにも人が押し寄せて申し訳ないという気持ちの方をよく覚えてる。

大阪市立美術館には、今はときどき仕事で訪れる。デイズニー・アート展のような、日本人のポリウムゾーン

つむらきくー 1978年大阪生まれ。2005年「マンイーター」(君は永遠にそいつらより若い)に改題で第21回太宰治賞を受賞しデビュー。2009年「ボストライムの舟」で第14回回芥川賞。2016年「この世にたやすい仕事はない」で芸術選奨新人賞を受賞。雑誌「ミーツリッジ」では、京阪神のミュージアムめぐるエッセイ「素人展覧会」を連載中。

## ◎次号の特集テーマ「見つめる」2018年9月下旬発行予定

「OSAKA MUSEUMS」では、大阪歴史博物館、大阪市立自然史博物館、大阪市立美術館、大阪市立東洋陶磁美術館、大阪文化財研究所、大阪市立科学館を中心として、大阪市の博物館・美術館の魅力と情報を紹介しています。

主な設置場所／大阪市内の各種情報センター、交通施設、文教施設、観光事業者、ホテル、複合商業施設、区役所ほか

2018年6月20日発行 発行／公益財団法人大阪市博物館協会  
〒540-0008 大阪市中央区大手前4-1-32 大阪歴史博物館内 tel. 06-6940-0550  
企画・編集／株式会社140B 撮影／西岡満 佐藤純子 デザイン／ツムラグラフィック 取材／杉本恭子